

令和3年度世田谷区総合教育会議（第1回）及び
世田谷教育推進会議（第2回）の実施結果について

1 主旨

「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づき設置した、首長と教育委員会の協議の場である世田谷区総合教育会議と、今日的な教育の諸課題を学校・家庭・地域及び教育委員会で共有し、協働して取り組むことを目的とする世田谷教育推進会議を連続して開催したので、報告する。

2 日時

令和3年7月21日（水）

① 13時00分～14時15分：世田谷区総合教育会議

② 14時25分～15時40分：世田谷教育推進会議

※新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、会場での区民傍聴は行わずビデオ会議ツール（Zoom）を使用してインターネットライブ配信を実施した。

また、7月27日より You Tube 区公式チャンネルにて動画配信を実施している。

3 視聴者数

上記開催時間において、147名の参加があった。

4 世田谷区総合教育会議について

テーマ：教育総合センターの開設に向けて

構成員：区長、教育長、教育委員

テーマをもとに、教育総合センターのめざすべき将来像や、ICT教育をはじめ、新しい学びへの転換期を迎える学校教育の支援について、区長及び教育委員会による意見交換を行った。主な意見は以下のとおりである。

区長

- ・世田谷区には多くの資源がある。学校での教育活動をベースにしながらも、大学をはじめ様々な研究機関などの地域の資源とのつながりを子どもたちにプレゼントしたい。子どもたちに、世田谷で学んでよかったと思ってもらいたい。
- ・教育総合センターは、単なる引っ越しにとどまることなく、学びは学校の中だけにあるわけではないという、ある種の価値革命を実現してほしい。地域に根差した教育改革を大いに期待している。
- ・区のシンクタンク機能を持つ、せたがや自治政策研究所や、研修担当部署も教育総合センター内に入る。同じ建物内に入ることで連携と協働を追求していきたい。

教育委員

- ・大学や民間企業等の連携により、学校運営や、教育活動の人的支援をすることは、多様

な教育活動、児童、生徒が様々な体験をすることになり、キャリア教育にもつながるため大変期待している。

- ・教員支援のための教育サポートセンターであってほしい。教員の研修支援としての機能、各学校からのオーダーメイドの研修、コンサルティングを行うセンターであってほしい。
- ・様々な調査を総合的に分析し、区の施策に活かすシンクタンクとしての機能を期待している。
- ・タブレットを通して伝える、対面で1人1人に合わせて伝える、子どもたち同士が議論をして身につける、など様々な手段がある中で、子どもたちの未来に最も有益な手段は何か。教育委員会、教員、子どもたちが一緒になって考えるなかで、世田谷らしい形が生まれてくるのではないか。教育総合センターが未来へ向けた新しいものを作り出せるようになっていければよい。
- ・情報提供、相談機能などの保護者支援や、データ分析に基づく施策を提案することに着手してほしい。また、それらを可能にするための新たな人材の配置が必要になってくる。

教育長

- ・急激に変化する社会に応じて、教育も変えていく必要がある。教育は3つの変化が必要と考えている。
- ・1点目は学び方の変化である。これからは、子ども自らが学びとるという教育に変えていく必要がある。2点目として、教員の指導の変化がある。黒板にチョークで書き込むのではなく、タブレットを活用した指導への変換が必要である。3点目は、地域や大学、企業との連携の必要性。ICTを活用することで距離と時間を超えてつながることが可能になった。技術的な支援とともに、ゲストティーチャーにいていただくなど、ICT環境を活かした教育に変えていく必要がある。
- ・教育総合センターにおいては、こうした変化に対応することのできる教員の育成、子ども、保護者への支援を打ち出していくこと、乳幼児からの切れ目のない支援、学校と地域、大学、企業などを結ぶ機能が必要と考えている。
- ・これからの子どもたちは、主体的に学ぶなかで正解のない問いに対しても立ち向かって行かなければならない。学校と地域、大学、企業などが連携してこうした変化に対応していく必要がある。

5 世田谷教育推進会議について

テーマ：ICT教育によって、子どもたちの学びはどう変わるのか

参加者：保護者代表2名、豊福晋平氏（国際大学 GLOCOM 准教授）、鈴木秀樹氏（東京学芸大学附属小金井小学校教諭）、教育長、主任指導主事、用賀小学校教員、上祖師谷中学校教員

豊福氏より5月に開催した保護者向けオンラインセミナーの振り返りを行い、続いて小・中学校の教員よりICTを活用した教育の実践例の報告を受けた。その後、その実践例と本会議のテーマをふまえた意見交換を行い、視聴者から受け付けた質問への回答を、参加者より行った。最後に豊福氏の講評を受けた。主な意見は以下のとおり。

用賀小の実践事例

- ・2年生がアンケート機能を有効に活用して清掃活動の取組状況を振り返り、次への意欲を高めている。

- ・ 教員同士が支え合ってすべての学級で ICT 活用を推進している。
- ・ 将来、子どもに必要な力を育成するために教員が失敗を恐れずにトライ&エラーを繰り返してよりよい活用方法を開発している。

上祖師谷中の実践事例

- ・ 特別支援学級で一人一人の特性に応じて ICT を活用し、学習に円滑に取り組めるようにしている。
- ・ 例えば、文章を作成する際に、手書きするよりもタイピング入力することでスムーズに作業を進められるようになった。スピーチする際に、文字や写真などを使って視覚に訴えることで認知しやすくなった。
- ・ 様々な ICT リテラシーを育成することで、将来の就労支援にもつなげていきたい。

保護者代表～用賀小の実践事例について～

- ・ アンケート機能を活用することで瞬時に友達の考えが学級全員に共有されていた。タブレット端末を使うことで、より多くの友達との学び合いができるようになると期待している。
- ・ 教員間でも ICT を活用して円滑に情報を共有し合い、ICT 活用を推進してほしい。

保護者代表～上祖師谷中の実践事例について～

- ・ 教員が一人一人の特性に応じてきめ細やかに対応していたが、全ての教員が多様な子どもの特性に応じるのは難しい。教員が導いていくだけではなく、子ども同士で ICT 活用のノウハウを共有し合い、「自分たちがこう学んでいきたい」と考えられるようにすると良いのではないかと。

鈴木氏

- ・ ICT を活用した教育を進めるうえで必要なのは「できた。わかった。」といった「喜び」と「学び」の両輪である。この両輪が、子どもたちの活動の原動力になる。子どもたちに自分に合ったやり方を選ばせ、最終的に「できた」という喜びを持たせることで学びに向かう力が育成される。教員はこの原動力をもとにして子ども自ら課題を見つけて解決していく探究的な学びを推進していくことが重要である。
- ・ ICT を活用した教育に対する保護者の不安があると、教員たちも保護者の反応を気にしてしまい、教育を推進するうえで乗り越える障害が大きくなる。それを解消するには保護者の方々からの意見や感想を学校に伝えるといった保護者の方々の協力が必要である。

視聴者からの質問と参加者からの回答は以下のとおり。

【視聴者からの質問①】

- ・ 夏休みに子どもにタブレットを有効活用させるにはどうしたらよいか。

用賀小学校からの回答

- ・ Qubena で前の学年の復習をすること、ロイロノートで自由研究やミニトマトの観察・調理日記を作成することを推奨している。

保護者代表からの回答

- ・ 宿題の進め方をはじめとした夏休みのスケジュールを、子どもに OneNote というソフトウェアで作成させている。

【視聴者からの質問②】

・夏休みに YouTube やインターネットばかり見てしまうことが懸念される。どのように対応したらよいのか。

鈴木氏からの回答

・保護者の方々が夏休みにタブレットを使用することを納得してもらうにはどうすべきかを、担任している6年生のクラスの授業で、子どもたちと考えた。その結果、「タブレット活用計画」を作成し、夏休みを迎える前に保護者の方々にプレゼンテーションすることで、安心して見守ってもらえるのではないかと結論付けた。子どもと保護者がタブレットの活用についてコミュニケーションを取り合い、共通理解を図ることが大切である。

【視聴者からの質問③】

・一人一人のお子さんの対応方法について、合理的な配慮を求めている。教育委員会で各学校の配慮の仕方、利用の仕方をデータベース化することはできないのか。保護者や教員たちと共通認識を深める一助となるのではないか。

教育長からの回答

・Microsoft Teams を利用した教員間の情報共有システムを運用している。そこでは、ICT インフルエンサーがとても活躍している。たくさんの事例を発信したり、教員からの質問に応じたりして他校の教員にも普及・啓発している。情報発信の質・量ともに充実させて、こんなことができるということを教員に伝えていく必要がある。

・現在、子どもたちに多様な他者と協働して問題を解決する力を育成していくことが求められている。ICT を有効に活用するといったミッションに対して、教員が他校の教員と円滑に情報共有をしながら協働して取り組ませることが重要である。

・また、保護者の方々にも現在の取組状況を発信するとともに、多様にあるニーズを丁寧に把握して、学校、家庭、地域が連携を強化するように支援していくことが我々の役目だと考える。

鈴木氏からの回答

・保護者の方はあきらめずに一人一人のお子さんの対応方法を学校と相談して、その子にあった良い方法を見つけてほしい。教員は大変だが一人一人のお子さんの対応方法はいろいろあるので、探してほしい。

豊福氏の講評

・一人一人のお子さんの対応方法についてのデータベースの作成は頓挫することも多く、きれいな辞書のようにするには時間がかかる。キーワードを入れれば関連項目を出すようなラフな情報共有をすることで、知恵がまとまるのではないか。

・教員が指示した通りでなくとも、ゴールがあっていれば良いという形にすれば、合理的な配慮がしやすくなる。そのためには試行錯誤を許すような心理的な安全が必要ではないか。

・タブレットの使い方は、多様であることを各学校から示されていることが大きな宝になる。それらを記録、構成し、共有していくことが必要である。

・鈴木氏のおっしゃった「喜び」と「学び」の両輪に加えて「他者からの承認」を加えることで、さらなる動機づけになる。